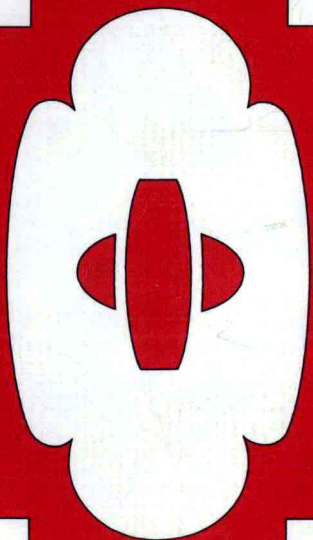


戦国の世を生きた
切支丹女性の愛と献身

J・シュピルマン作
森本 霞訳

十字架と菊

下



J・シュピルマン作 森本霞訳

十字架と菊

下巻

戦国の世を生きた

切支丹女性の愛と献身

エンデルレ書店

十字架と菊（下巻）

昭和58年2月20日 初版発行 ©

訳 者	森 本 霞
発 行 者	エンデルレ・ルーベルト
印 刷 者	三協美術印刷株式会社

東京都新宿区四谷1-5

発 行 所 (有) エンデルレ書店／ヘルデル代理店

定価 2200 円

登場人物

洗礼名

アゴスチノ	小西 ^{ゆきな} 行長。摂津 ^{かつ} の守。肥後藩主。	ルドビコ	その息子。
ルチャ	キク。行長の一人娘。直純の妻。	マリヤ	その娘。
プロタジオ	有馬 ^{はるのぶ} 晴信。有馬藩主。	アンナ	その娘。
ミゲル	直純 ^{なほじゅん} 。晴信の先妻の子。	クララ	その下女。
ジュスタ	晴信の後妻。	レヤン	武富勘衛門。
アグネス	その娘。	パウロ	その息子。
アガタ	その娘。	トマス	織部弥兵衛。
フランシスコ	その息子。	シモン	その息子。
マテオ	その息子。	アンドレ	その息子。
アドリヤノ	滝口 ^{たきぐち} 主水。小浜出城の城代。	マチャス	甚九郎。弥兵衛の弟。
ジョアンナ	その妻。	マルタ	弥兵衛・甚九郎・ジュリヤの母。
マダレナ	その娘。	ペドロ	有馬藩主の船頭。
ジャコブ	その息子。	イグナチオ	有馬藩主の小姓。
ルイス	林田市之助。島原出城の城代。	ジョアン	織田秀信。美濃藩主。信長の嫡孫。
ジュリヤ	その妻。	ジュスト	高山 ^{たかみ} 右近。高槻藩主。

ソテロ	フランシスコ門派の教師。
バリニヤノ	ゼズス門派の教師。
バシオ	ゼズス門派の教師。
ロドリゲス	ゼズス門派の教師。
伝衛門	行長の家老。
モヒデ	ルチャの婆や。
守之丞	有馬城の執事頭。
筑後	筑後藩主。
三成	石田氏。近江藩主。
太閤	豊臣秀吉。
秀頼	その息子。
家康	徳川氏。一時秀頼の後見役。
クニ	その娘。
秀忠	その息子。
左兵衛	家康の特使。
半三郎	家康方の大将。
権左衛門	その侍。

目次

22	不興 ふきよう ……………	1
23	遂に深みへ……………	15
24	悲痛な時……………	29
25	出陣……………	44
26	救おうとして……………	57
27	姫の入城……………	68
28	晴信殿の帰還……………	83
29	悲しい別れ……………	96
30	第四部 殉教……………	
30	小浜で……………	112
31	遅過ぎた……………	130

32	寺沢半三郎	142
33	藁屑と粃穀	154
34	ルチャの別れ	170
35	更に一步深みへ	187
36	幼い餌食	200
37	大坂で	213
38	燔祭の日	229
39	懲罰の裁き	249
結び	国を追われた人々	266

第三部 離 別

22

不興^{ふきよう}

その頃晴信殿^{はるのぶ}はルチャと馬で鷹狩りに行っていたが、殿もまた不興であった。この若い婦人は狩りに不慣れで、嘴^{くちばし}の曲がった立派な朱鷺^{とぎ}が葦^{あし}の茂みから飛び立った良い折に、鷹の足の鎖を絡ませてしまい、やっと手から放った時には、もう見事な獲物が逃げてしまっていた。このことが殿の不興を募らせ、もう一度同じようなしくじりがあった時、殿が止める合図をした。城へ戻る途中、ルチャは馬上から元気に話し掛け、舅殿^{しゅうとどの}の気持ちを引き立てて好意を取り返そうとしたが、無駄であった。到頭殿^{とうとう}がうるさいと、はつきり素振りに出したので、ただ黙って悲しい気持ちで側^{わき}について行つた。

城へ帰ると、山で難に遭つた狩りの一行が今しがた門をくぐって来る所であった。驚いてルチャが担架を見ると、上に奥方が横たわっていた。直ぐに近づいて、「まあ、これはどうしたこと」と叫んで、馬から跳び下りた。「ジュスタ姉上、まさか重い怪我ではないのでしょうかね。」それから奥方の上へ身を屈めて、小声で尋ねた。「姫殿に。」

「ただ倒れて、足を挫いただけです」と奥方が大きな声で答えて、その時担架の横へ急いで来た晴信殿に手を差し出した。「大したことはないと思います。けれどもお願いですから、有馬へ帰るのを早めて下さい。よくもてなして下さっている筑後殿に、これ以上迷惑をかけたくないのです。どうかこの儘船へ連れて行って下さい。」

筑後殿がこの急な旅立ちに強く逆らったけれども、結局奥方の望みに従わなければならなかった。それで直ぐに若君達も呼んで、行列が港へ向けて動き出そうとしていた。

「一体わしの息子ミゲルはどこへ行ったのでしょうか」と晴信殿が尋ねた。

「姫の側におられた」と辛うじて不快な気持ちを抑えながら、筑後殿が答えた。「あれを御覧。二人がやっと追いついて来ました。」

ルチャは夫が家康殿の娘の駕籠と馬を並べてゆっくり来るのを見て顔色を変え、幼いマテオが叫んだ。「ミ、ミ兄上。どうしてそんな余所の人と来るんです、母上と一緒にいないで。母上、あの女が押し倒したのでしょうか。まだ痛いんですか。」

父親も言葉を添えた。「この子の言う通りだ。ミゲル、お前は深手を負った母親の側にいるべきではなかったのか。切支丹でなくとも、第四戒を大事にするぞ。」

「何でもないことに大騒ぎしないで下さい」と直純が腹立たしく答えた。「母上は少しよろめいただけです。僅かのかすり傷ぐらいは有馬へ帰ったら直ぐ治るし、もう二、三日私をここにおらせて下さい。狐狩りをしたいから。」

姫がせせら笑ったが、ルチャは驚いて奥方に顔を寄せて言った。「どうぞそんなことにならな

「のように。あの二人はこの通りです。」

すると奥方が痛みをこらえながら、半ば担架から身を起こして、きつぱりと答えた。「ミゲル、狐狩りは次の折迄延ばしてくださいね。」その澄んだ目に見据えられて、母親を押し倒した卑怯（ひきょう）を父に知らせるぞ、と脅されているような気がした。

「では、まあ」とこの臆病者が恐れて言った。「そんなに一緒にいてもらいたいなら。姫殿、狩りは延ばすより仕方ありません。」続いてクニの肩に手を掛けて囁いた。「何れまた。申し合わせた通り、合図をしますから。」

「では、また」と姫が大きな声で言って、ルチャに会釈した。それから担架に近づいて奥方に向かい、辛抱して早く治るようと、大変優しい口調で挨拶した。そして「私達二人の狩りのために、そんなに気を遣わないで下さい」と終わりに付け足してから、もう一度ルチャと皆に「では、また。また直ぐに」と言って、一人でさっさと城内へ引き揚げに行った。

「本当に嫌な人です」と奥方が担架の直ぐ脇にいるルチャに小声で話した。「あの目つきがどうしても気味悪いので、十字架の印をして身を守ろうと思った位です。」

「それにしても、気が付きませんでしたか。妙に力を入れて『では、また。もう直ぐに』と言いました。それが怖くて。」

「何も恐れることはありません。今日にも有馬へ帰ったら、殿によく話します。あの二人につ迄もこんな遊びをさせていて良いわけがありません。この『またもう直ぐ』をどれだけでも待たせてやります。」

行列が港へ着くと、怪我人を静かに船へ運び入れて、厚い布団に寝かせた。筑後殿の侍医が膝を診ると、骨は折れていないが、暫くの間痛むので、罨法で冷やすようルチャに指示し、有馬へ帰ってから傷口に貼る薬草の名を教えた。病人の容態を見届けてから、筑後殿が別れの挨拶をした。怪我をした奥方とルチャには心を込めて。晴信殿にはやや余所々しく。だが直純には何も言わず、直ぐに背を向けてしまった。

すると「小父上」と慌てて声を掛けて言った。「私を次の狐狩りに呼ぶのを忘れないで下さい。今度はいつ頃になりますか。」

「分からん。わしの見る所、お主は別の獲物を狙っているようだな。だが用心したがよからう。御母堂よりも酷い怪我をせんようにだ。」筑後殿は下船しようとして棧橋へ架かった渡し板を歩きながらこう答えて、若者には目もくれなかった。

直純は唇を噛み、嘲笑って囁いた。「さては我々の目論見に感づいたか。だがまさかあの鳥を攫って行くとは思ってもいないだろうな。馬鹿正直で、姫の言うことを鵜呑みにしているから。何れ鳥籠をお前の手の届かぬ所に置いてやる。ははは、間抜けめ。」

船が一杯に帆を張り、島原へ向けて滑るように走っていた。ルチャと子供達は病床の周りに座って、面白い話で奥方の痛みを忘れさせようとしたが、膝が疼いて楽にならないので、到頭フランシスコがむずかかって言った。「あーあ、筑後へ行くのを楽しみにしていたのに、母上がこんなことになってしまって。あの目つきの良くない姫がやったのに決まっている。悪い女は皆あんな

目をしているか、帰ったらヒデに聞いてみる。この間の昔話で、人が意地悪になると大蛇より怖いと言ったから。」

「なに、あんな者。少しも怖くない」と弟のマテオは平気だった。「ねえ、ル兄嫁上。十字架の印をすれば、神様が守って下さるよね。母上、今朝起きる時、きっとこれを忘れたのでしょう。さもなければ、姫にあんなことをされる筈がないから。」

奥方は痛みをこらえて可愛い子供達の話にはほほ笑み、側へ引き寄せて言った。「多分朝の祈りを良くしなかったからでしょうね。あなた達は十字架の印を丁寧にするのですよ。そして悪いことに遭遇しないように、守護の天使に祈りなさい。でも姫を悪い人と言ってはいいけません。切支丹ではないし、私達に余り親切でなくても。ですから姫のために祈りなさい。敵をさえも愛さなければならぬのですから。」

「はい」とフランシスコが答えた。「ですけど姫も膝に大怪我をしたら、ためになるに違いありません。だって、苦しんでから心を入れ替える人が多いと、ル兄嫁上から聞いたことがあるから。ねえ、兄嫁上。だからそうしたらいいんです。」

「改心をですか、それとも怪我をですか」と母親が尋ねた。

「初めに痛い目に遭って」と子供が正直に答えた。「それから、いい人になるように。」

奥方がルチャの助けを借りて、子供達に御大切（神の慈愛）を教えている頃、晴信殿は暗い顔をして船の舳先（へさき）に立ち、今迄に百遍も思案した計略を、また改めて思い巡らしていた。船が島原に

近くなった時、長子を呼んで、言った。「お前は姫と何か話をつけたようだな。姫は我々に守ってもらつてもいい。それが『直にまた』と言つたあの言葉で分かつたのだ。まあ、これだけでも、筑後迄行つた甲斐があつたわけだ。不快な旅ではあつたが。」

「姫は有馬へ逃れて来るだけではありません。私の妻になる約束をしました」と直純が誇らしげに答えた。

「いいか、それはわしの許しなしには出来ぬのだぞ」と殿が念を押した。

「しかしもう私からも約束したのです」と息子がむっとして答えた。

「お前はルチャとも約束してゐるではないか。しかも遙かに尊い仕方だ。だから先ずこれを解かねばならんことになる。もし仮にわしが新しい縁組みを認めるとすればな。だが我々の望みを遂げるのに、家康殿の娘を娶る要は全くない。ただわしの力の及ぶ所に置き、父親に持ちかけて、長崎と取り替えさせることが出来ればよい。わしはそこ迄は考えているが、これ以上はせぬ。それに、姫を決して有馬には置かぬ。また筑後からお前が連れて来てはならぬ。家臣の中でルイスが一番賢いから、迎えにはこれを遣る。そして島原の出城に閉じ込めて、大事にする。父親が長崎との引き換えを確約する迄。分かつたか。そして、いいか。お前は決して出城へ行つてはならぬ。姫がそこにゐる間はな。」

直純は父親の言い付けを、笑つたらしいのか、怒つたらしいのか、分からなかつたが、兎に角一生懸命反對して、言い訳をした。そして「私が筑後へ連れに行かなければ、姫は決して動きません」と特に力をこめて答えた。

「取り決めた合図の仕方をお前からルイスに教えれば、それでよい。姫が舟に乗るのは間違いない。ただ何よりも大事なものは、姫が有馬にいないことと、お前が連れ出したのではないと、筑後殿に言い切れねばならんことだ。そうすれば、左兵衛が親元へ返そうとしたのだと思うだろう。こうして我々は筑後殿と仲を悪くしないで、長崎を手に入れることが出来る。」

直純は結局父親の言う通りにしなければならなかったが、その時、別の考えがあった。「姫が初め島原にいるのは止むを得ないとしても、父の言い付け等守るものか。何とか其処へ行く道を見つけて、何れ妻にして、有馬へ連れて来てみせる。」腹の中でこう思いながら答えた。「ではそれで結構です。父上のいいようにして下さい。ルイスへは合図のことを知らせます。所で私の目に狂いがなければ、御覧なさい。あそこの岸にルイスが家来達と一緒に立っています、出迎えに来て。またあの船の者達はどうしたのでしょうか。皆落ち着かない様子で、頻りにこっちを見えています。」

直純の目は間違っていないかった。藩主の船が岸に着くと、船乗りの一団が近づいて来て、頭立った武骨な男が「上様」と叫んで、白髪頭を地面へ押しつけた。「上様の堅気な僕をポルトガル人めの無道からお救い下さい。」

「これ、顔を上げよ、源太。お前を知っておる。太っ腹で、威勢のいい船頭だな。切支丹ではないが。所で陳情とは何だ。言うて見よ。不都合があれば、取り締まってやる。わしに出来ることはな。」

「有り難いお言葉、恐れ入りましてございます。上様に神仏の御加護がありますように」と老人が答えた。「実は事の経緯はこうでございます。上様の下民である私めが持ち船でマカオへ参りました所、南蛮の悪者共がそこに巣くっておりました。丁度今の長崎と同じです。どうか奴等を悪者と呼ぶのをお許し下さい。あす迄の船旅は順調でした。八幡様に願をかけたお陰です、わっし等は新しい神様を信心しておりませぬので。港で積み荷の茶を降ろそうとしますと、南蛮人共が法外な税を吹っかけて来たので、言い争いになりました。そして急にわっしの甥に殴りかかって来ました。これが本当なのですが、向こうはその逆を言いふらして大喧嘩になり、到頭奴等を皆海へ投げ込んでやりました。溺れた者はなく、家鴨のようにすいすいと岸へ泳いで行きました。わっし等は笑って、事が終わったものと許り思っておりました。所が夜になってから、沢山の小舟が攻めて来ました。そして刀を抜いて乗り込んで来て、わっし等を捕らえて、ペッソアという頭目の所へ引き立てて行きました。(史実では、慶長十三年の出来事)この男が四千両の罰金を申し渡したので、断ると、積み荷の茶を百箱余りも持つて行ってしまうました。そして『船諸共差し押さえなかったことを有り難く思え』と言うのです。こうして恥と損を受けて、すぐごと島原へ帰って来た次第です。ただ最後にこのペッソアに向かって『わっし等は或る切支丹大名の配下だ。後で見ておれ』と言ってやりました。すると奴がせせら笑って『お前の所の大名が泣きついたら、教師達が神の名を持ち出して、勝手に我々を呪うだらうさ』と毒づいていました。」

「ふん、よく調べて見ねばならぬ」と殿が顔を曇らせて言った。「もし本当にペッソアがお前達に不条理を働いたのなら、教師にポルトガル国王へ訴えさせる。そうすれば、マカオ総督の

職を首になるだろう。今の所、これ以上はお前にしてやれぬ。だが損を受けた茶百箱は、勘定方に弁済させるから安心せよ。」

「厚いお情けにお礼の言葉もございません。ただ末長く天地の神々が上様をお守り下さいますように」と老船頭が答えた。「所で実はマカオから帰る日に聞いたことがございます。このペッサメがわっし等の直ぐ後から、大船に明や南蛮の財宝を一杯積んで、長崎へ来るというのです。そうしたら、今度は上様が仕返しをなされたら宜しいでしょう。わっしも喜んで部下を引き連れて加勢に馳せ参じます。」

「それなら、お前の船が港の外で待ち伏せするのだ。南蛮船を見つけ次第、直ぐに知らせよ。よし、今度はポルトガル人に埋め合わせをさせる番だ。おい、ルイス。戦の出来る船が今この港にどれ位あるか。」

「上様、せめて三十艘はございます。」

「それなら大丈夫だ。ガレオン船三艘と渡り合うことも出来る。所で船手頭はどこにいる。直ぐ船に武士を乗せて、用意させよ。わしはこれから馬で山越えして長崎へ行く。この船団も明日中には向こうへ着く筈だ。ペッサメが現れたら、問いつめてやる。なに、長崎奉行がポルトガル人の肩を持っても、気にする要はない。船の指揮はルイスが取る。」

「宜しい、父上」と直純が言った。「それなら、例の筑後行きは私が引き受けます。」

「待て。それはならん。では、ルイスはここに残れ。代わってお前が船を長崎へ回すのだ。抗弁は許さぬ。馬には皆手綱をつけよ。侍が百人位わしと一緒に来い。半時後に出掛ける。」

殿は氣が高ぶっていて、奥方初め、ルチャや子供達にさえ、殆ど挨拶もしなかった。そしてジュスタが願ひ出て、ポルトガルの役人を敵に回す前に、その国の教師に中へ入ってもらうように言つたのを、喜んで聞こうとしなかった。「わしはあのペアデレ達を信用せぬ。自分の国の肩を持つに決まっているし、わしが長崎を手に入れたら、直ぐに何をするかも知っているのだ。だがこれだけはお前にも知らせておくが、何れわしから司教の所へ出向いて、有馬家にどういう氣持ちを抱いているのか、確かめるつもりだ。」

「是非そうなさって下さい」と奥方が答えた。「司教様はあなたのために、良心が許す限り、出来るだけのことをして下さると思います。それからミゲルと姫について、少しお話したいのですが。」

「今は暇がない。だがそのことは知っている。お前から言われる迄もない。ミゲルは船を率いて長崎へ行く。勝つて帰ったら、もう一度このことを話そう。では無事で。わしのために、子供達に祈らせてくれ。」

そう言つて殿が奥方の側を離れ、ルチャには、前を通りながら、ただ無愛想に会釈しただけであつた。それから市之助を呼んで、必要な指示をした。この侍は黙つて聞いていたが、困惑の色は隠せなかった。

「家康殿の娘を助けようとしているのに、お前は余り氣乗りしないようだな」と殿がむつとして言つた。

「正直に申し上げますと、この名譽な務めは誰か外の侍に言い付けて下さいましたならば、と